

アテネ・フランセ文化センター (御茶ノ水)

2025年12月5日(金) - 13日(土) [日月休映/全7日間]

『山の手の顔』(1991) 撮影現場

あらゆる対象の生きている姿を捉えようとした人。葉っぱの一枚でも、仏像でも、どうやったら生きていることを写せるか。幼い頃、岩手の山奥で経験したエキスが、表現の根底にある。私が助手についた『新しい鉄』では、カメラをどんでんに返した。照明部は丸一日かけて、数十台の5キロ・ライトを逆側に配置し直した。瀬川さんは、鉄が生きていると思っている。何かを感じて、カメラの位置を変えた。その何かはわからないが、カメラの凄さを教えられ、俺にできるかなあと考えた。しかし、撮り方によって生きている姿が見えることは、のちに私も体感する。映画を辞めようと思っていた私が、考えを改めたのは、この瀬川順一の映画に向かう姿を見たことが大きい。

——— 鈴木達夫 (カメラマン)

戦ふ兵隊

雪の結晶

貝塚

母なれば女なれば

新しい鉄

挽歌

法隆寺

新しい製鉄所

留学生チュアスイリン

夜明け前の子どもたち

仕事 = 重サ × 距離 三菱長崎造船所からのレポート

森と人の対話 井川山林の記録

風 The Wind

遠い一本の道

不安な質問

白き氷河の果てに K2登頂の記録

海とお月さまたち

水俣の図・物語

早池峰の賦

アントニー・ガウディー

をどらばをどれ

奈緒ちゃん

ルーベ カメラマン瀬川順一の眼

回想・瀬川順一 土本典昭、2003年3月13日

歿後30年記念特集上映

カメラマン瀬川順一と 日本ドキュメンタリー映画史

プログラム監修: 筒井武文

当たり前のことだが、16ミリカメラならば11分ちよっとのフィルムしか詰められない。その中で、五感を澄まし、抜群の洞察力でチャンスのをがさない、瀬川順一カメラマン。時に緊張感に満ち、時に優しいまなざしに溢れている。ドキュメンタリーを思考するもののみならず、フィクションを思考するものにとっても必見の上映!

——— 芦澤明子 (カメラマン)

Cinematographer Segawa Junichi:
Tracing Japanese Documentary Cinema through His Works

[主催] アテネ・フランセ文化センター、瀬川順一再訪プロジェクト
[共催] 映画美学校

ATHÉNÉE FRANÇAIS
CULTURAL CENTER
アテネ・フランセ文化センター

映画美学校
THE FILM SCHOOL OF TOKYO

IFAJ
国立映画アーカイブ

戦後30年記念特集上映

カメラマン瀬川順一と日本ドキュメンタリー映画史

.....2025年12月5日(金)~13日(土)

カメラマン瀬川順一(1914-1995)。その撮影現場に立ち会ったことを決定的な経験として自ら語り継ぐことになる、ドキュメンタリー映画史上最重要作の一つ『戦ふ兵隊』に始まる本特集上映では、100本以上に及ぶ多彩な撮影作品から精選したプログラムを通じて、とりわけ記録映画において大きな功績を果たした一人の撮影者の、錚々たる監督たちとの半世紀にわたる協働の軌跡をたどり直す。関連作品も上映し、その事績をあらためて検証・顕彰すべく、トークセッションを実施。瀬川の名の下につとったこれら諸作品は、日本ドキュメンタリー映画の粋(もとよりその一部)をなす、と言ってさして過言ではないだろう。瞠目すべき劇映画もふくめ、その撮影の技と創意をスクリーンの上に発見していただきたい。そして、戦時を回想しつつ「撮ること」をめぐる根底的な問いを突きつける『ルーペ』での瀬川の言葉もまた、聞き届けられることをいまなお待っている。

12月5日(金)

17:00-.....戦ふ兵隊 [66分] + 雪の結晶 [6分] + 貝塚 [13分]

18:55-.....母なれば女なれば [100分]

12月6日(土)

13:00-.....森と人の対話 [50分] + をどらばをどれ [50分]

15:10-.....奈緒ちゃん [98分] ★

17:25-.....ルーペ [90分] + 風【デジタル上映】 [11分]

19:10-.....**トークセッション1「カメラマンが見た、瀬川順一の撮影現場」**
宮武嘉昭 + 内藤雅行 + 瀬川龍(聞き手:筒井武文) [80分]

12月9日(火)

16:00-.....仕事 = 重サ × 距離 [34分] + 不安な質問 [85分]

18:30-.....遠い一本の道 [112分]

12月10日(水)

14:30-.....水俣の図・物語 [112分] + 回想・瀬川順一 [21分] ☆

17:15-.....早池峰の賦 [184分] ★

12月11日(木)

16:00-.....挽歌 [116分]

18:25-.....白き氷河の果てに [123分]

12月12日(金)

15:00-.....アントニー・ガウディー [72分] + 法隆寺 [23分] ☆

17:10-.....新しい製鉄所 [43分] + 新しい鉄 [31分] ☆

19:00-.....戦ふ兵隊 [66分] + 雪の結晶 [6分] + 貝塚 [13分]

12月13日(土)

13:00-.....ルーペ [90分] + 風【16mm上映】 [11分]

15:10-.....留学生チュアスイリン [51分] + 海とお月さまたち [50分]

17:20-.....夜明け前の子どもたち [116分]

19:20-.....**トークセッション2「カメラマンが見る、瀬川順一の撮影術」**
飯岡幸子 + 四宮秀俊 + 米倉伸(聞き手:岡田秀則) [70分]

★:ロールチェンジのため途中に中断5分 ☆:映写機切り替えのため作品間に中断3分

トークセッション登壇者(いずれもカメラマン・撮影監督)

宮武嘉昭 1947年生。『ゆめこの大冒険』(1986、筒井武文)、『アリス イン ワンダーランド』(1988、同前)ほか。『仮名手本忠臣蔵』(1987、松川八洲雄)などで瀬川の助手。

内藤雅行 1948年生。『ドキュメンタリーごっこ』(2000、伊勢真一)ほか。『円空』(1978、松川八洲雄)を瀬川と撮影。『遠い一本の道』などで瀬川の助手。

瀬川龍 1957年生。『しあわせのパン』(2012、三島有紀子)、『映像の発見』(2015、筒井武文)ほか。『アントニー・ガウディー』などで瀬川の助手。順一の次男。

飯岡幸子 1976年生。『偶然と想像』(2021、濱口竜介)、『すべての夜を思いだす』(2022、清原惟)、『ルート29』(2024、森井勇佑)ほか。

四宮秀俊 1978年生。『きみの鳥はうたえる』(2018、三宅唱)、『ドライブ・マイ・カー』(2021、濱口竜介)、『恋愛裁判』(2025、深田晃司)ほか。

米倉伸 1992年生。『ナミビアの砂漠』(2024、山中瑠子)、『BAUS』(2025、甫木元空)、『くままつ』(2025、滝野弘仁)ほか。

入場料

[1回券] 一般1,500円/シニア・学生・障がい者1,200円/会員1,000円 [3回券] 3,000円

[全作品鑑賞券] 10,000円(限定50枚・各作品1回鑑賞・複数人使用不可)

* 当日券のみ/先着順 * チケットは1回目の上映30分前から当日上映分を販売します。

* トークは本特集のチケット半券提示で入場自由。

会場 & お問合せ

アテネ・フランセ文化センター

東京都千代田区神田駿河台2-11 アテネ・フランセ4階 | JR・地下鉄 御茶ノ水・水道橋駅より 徒歩7分

TEL.03-3291-4339 (13:00-20:00) <https://athenee.net/culturalcenter/> infor@athenee.net

「カメラマンの映画史」への招待

筒井武文(映画監督)

通常、映画は監督や脚本家、俳優の名前によって、記憶される。それが見える映像の映画史だ。だが、その映像を写している者がいる。カメラマン瀬川順一は言う。「いないけど、いる」。彼は、カメラをどこに置かを生涯にわたって探求し続けた。ここに集められた作品群——ドキュメンタリーもあれば、劇映画もあり、いわゆるPR映画と言われるものも多い——をとおして見たとき、どう世界を肉体化していくかというカメラの視点による映画史が現れてくる。

カメラ・ポジションの正確さを極めた例として、『新しい鉄』『新しい製鉄所』を挙げよう。戦後日本の発展の象徴として企画された作品の撮影が瀬川に委ねられる。40人以上の照明部を率い、最善の角度と光を探究する。鉄が溶解し、新しい姿に生まれ変わる変化のなかに、美としか呼べないものが生まれる。そのカメラ・アイが建築・彫像に向かうとどうなるか。『法隆寺』『アントニー・ガウディー』。現地に行っても、この美は見つからない。瀬川が発見し、映画として再創造した美であるからだ。

一方、どうなるか予測不能な現実にも目を向ける。『留学生チュアスイリン』『夜明け前の子どもたち』『不安な質問』。そこでは、対象をどう撮るべきなのか、撮っているのかとの迷いを克服していく過程が見えてくる。

その両系列の統合として、見えないものを見せる監督・撮影作『風』、劇映画『遠い一本の道』、ドキュメンタリー『水俣の図・物語』がある。そして、『をどらばをどれ』の現世と彼岸の境の世界に至る。

『戦ふ兵隊』の撮影助手として、過酷な戦場を回った瀬川順一が見つめた戦後社会とは何だったのか。戦後30年、「カメラマンの映画史」を発見された!

◎カタログ刊行

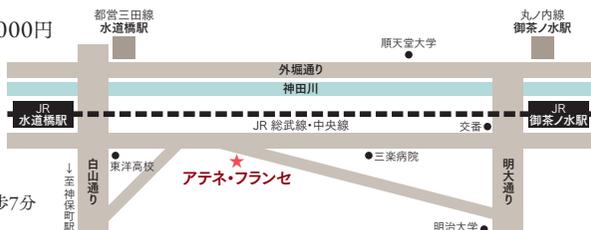
『カメラマン瀬川順一と日本ドキュメンタリー映画史』

筒井武文・田中晋平による瀬川順一論、第一線に立つ映画監督・映画研究者らによる作品論のほか、瀬川の講演録、フィルムグラフィなどを収録。瀬川順一を通じた日本映画史再考の試み。必携の完全保存版! B5判60頁見込、予価1,500円。

発行=アテネ・フランセ文化センター

◎大阪上映

シネ・ヌーヴォにて、2026年1月31日(土)~2月6日(金)



溶鋼と朝靄——シネマトグラファー瀬川順一の流儀

岡田秀則(国立映画アーカイブ主任研究員)

生きて躍動しているかのように見える奈良は法隆寺の仏像たち。逃げ込んだ雪山の険しい白さの中でサバイバルの死闘を繰り広げる強盗犯たち(三船敏郎と志村喬が演じた)。赤々と光る溶鋼が、隙のない工程を経て見事な鋼鉄に鍛えられるまで。水俣湾の穏やかな水面に向き合い、公害病の悲劇を巨大な紙の上に表現する画家の夫妻。なめるような執拗さで捉えられたサグラダ・ファミリアの建造物の群れ。厳しい風土を感じさせる東北の霊峰早池峰山の威容。大量生産の食品に囲まれた暮らしに背を向け、自主管理の農場を拓いた若い男女たちの祝祭。戦争で夫を失い、子どもを育てるため必死でミシンを踏み続ける母親(山田五十鈴が演じた)。てんかんと知的障がいを持ちながら、家族の優しさに包まれて生きる少女の成長。心を寄せた建築家と阿寒湖畔のホテルで結ばれた翌朝、道東の濃い朝靄に包まれながら決然と歩く若い女(久我美子が演じた)。

私たちはそろそろ、これらの映像を亀井文夫、伊勢長之助、羽仁進、土本典昭、松川八洲雄、勅使河原宏、羽田澄子、伊勢真一、さらに谷口千吉や五所平之助といった錚々たる映画作家たちの人名録から解放すべきではないだろうか。上記はあえて撮影の順序に沿うことなく並べたが、これらはすべて、今年没後30年となるシネマトグラファー瀬川順一によって獲得された映像である(各映像の題名はあえて省略しておこう)。瀬川はノンフィクション映画を職務の中心に据えたが、自然と人間を鋭く対置しながらフィクション作品にも才覚を発揮し、映画が捉え得る領域を幅広く踏破した。

大きな名前の陰に隠れないという意味では、「語る人」瀬川も同じであった。伊勢真一によるドキュメンタリー『ルーペ カメラマン瀬川順一の眼』の中で、撮影は演出家に従属するものだという「カメラマン女房論」を批判したのも彼であった。『戦ふ兵隊』の撮影助手として中国戦線に赴いた時のことを彼はつぶさに語り出す。監督亀井文夫は、羽交い締めにされて怯える中国の少年を撮影技師三木茂に撮れと迫ったが、三木は亀井のその手も映るからと言って撮影を拒んだ。横で見ていた瀬川は三木を当初こそ臆病と見たが、やがて、撮らなかった消極性こそ三木の撮影倫理だったのだと気づき、それを後進の撮影者たちに語り継いだ。

撮らないという意志も含めて、技術者を越えた人間としての《撮影者》がここに立ち上がる。この華麗なフィルムグラフィと「撮らない権利」は決して矛盾しない。瀬川が半世紀にわたって鍛えた技術と感性、そして倫理の中から、私たちは日本映画史のいまだ探求されざる相貌を視認できるはずだ。

●山形国際ドキュメンタリー映画祭公式ガイド『SPUTNIK—YIDFF Reader 2025』第5号より転載。



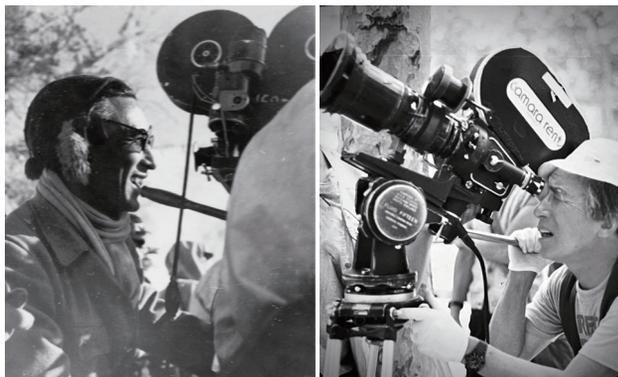
『夜明け前の子どもたち』(1968)撮影現場(右端が監督・柳澤壽男)ウラ面左上の写真も同じ

瀬川順一 Segawa Junichi

1914年12月2日、岩手県一関に生まれる(やはりカメラマンとして活躍した瀬川浩は、順一のいとこの子息にあたる)。1931年、松竹キネマ蒲田

撮影所に入社し、現像部に所属。翌年、P.C.L.映画製作所へ移籍、1933年に現像部から撮影部に転属。同年の同社第一作『ほろよひ人生』を皮切りに、立花幹也や唐沢光弘らの撮影助手を務める。1936年、召集され満州で兵役につく。1938年に病を得て帰還し、東宝映画文化映画部へ復職した直後、『戦ふ兵隊』の撮影助手として中国に赴き、「ルーペ論争」の発端となる出来事に立ち会う。初めての撮影作品は1940年『貝塚』と言われるが、瀬川自身の証言によれば同年の『温泉の科学』が先だという。1941年に再び応召、戦地を渡り歩く。1945年復員後、東宝撮影所撮影部に所属。三船敏郎のデビュー作『銀嶺の果て』(1947)をはじめ劇映画に携わるも、ほとんどなかった東宝争議を中央委員として闘い、解雇されると、1950年にキヌタプロダクションの結成に加わる。1953年からはフリーカメラマンとして、岩波映画製作所や古賀プロダクションなどで多くのPR映画の撮影を手がけ、『日本の鉄鋼』(1955)で日本映画技術協会・技術賞を受賞。『留学生チュアスリン』(1965)で自主製作作品に加担して以降、インディペンデントな製作体制によるドキュメンタリーにも積極的に参加。羽仁進、勅使河原宏、伊勢長之助、土本典昭、柳澤壽男、松川八洲雄、羽田澄子、伊勢真一ら、戦後の日本記録映画史を形成した監督たちとの協働のなかで、多種多様な題材を卓抜な撮影術でフィルムに記録していった。1991年度日本映画テレビ技術協会・春木賞受賞。撮影作品は長短篇合わせ100本以上を数える。1995年10月5日、肺癌で逝去。12年に及んだ撮影を経て同年夏に封切られた『奈緒ちゃん』が遺作となった。1997年1月、瀬川その人にフォーカスをあてた『ルーペ』が公開。その際に組まれた小規模な特集プログラム以来、今回が初めての瀬川順一特集上映となる。

『銀嶺の果て』(1947、左)、『アントニー・ガウディー』(1984、右)撮影現場





歿後30年記念特集上映

カメラマン瀬川順一と 日本ドキュメンタリー映画史

Cinematographer Segawa Junichi: Tracing Japanese Documentary Cinema through His Works

戦ふ兵隊

1939年 | 66分 | 白黒 | 35mm [16mm上映]

東宝映画文化映画部 | 監督・編集: 亀井文夫 | 製作: 松崎啓次 | 撮影: 三木茂 | 現地録音: 藤井慎一 | 音楽: 古関裕而
亀井文夫が手掛けた『上海』『北京』に続く日中戦争の戦地報告映画であり、亀井本人は本作で初めて撮影現場に赴く。漢口攻略作戦に参加する兵士たちの記録だが、勇ましさを掛けた、疲労困憊の姿を描いたかゆえ、厭戦的な作品と判断され上映不可。現場で監督と撮影の三木茂との間で生じた出来事が後の「ルーベ論争」の契機となる。「世界十大傑作のうちの一つだ。未だ認められざる偉大な映画!」(A・ソークロフ)。



雪の結晶

1939年 | 6分 | 白黒 | 35mm | 全2巻中前半のみ・英語版

* 国立映画アーカイブ所蔵作品

東宝映画文化映画部 | 演出・撮影: 吉野馨治 | 指導: 中谷宇吉郎
日本の科学映画の先駆けにして、戦後の岩波映画製作所の設立にもつながった記念碑的短篇。北海道大学で雪の結晶の研究を進めていた中谷宇吉郎が指導し、十勝岳の山小屋と大学の実験室に籠って撮影が行われた。大気の状態や気温の変化などによって、複雑多様な形を示す結晶の美しいイメージが観察されていく。若き瀬川も撮影助手として参加し、顕微鏡撮影に携わったという。現存する戦前版(英語版)の前半6分を上映する。



貝塚

1940年 | 13分 | 白黒 | 35mm * 国立映画アーカイブ所蔵作品

東宝映画文化映画部 | 演出: 下村健二 | 撮影: 瀬川順一 | 録音: 酒井栄三 | 音楽: 菅原明朗
同年製作の『温泉の科学』と並ぶ、カメラマン・瀬川順一の最初期の撮影作品。埼玉県和土村(現在のさいたま市岩槻区)で東京大学の人類学教室が行った貝塚の発掘調査のドキュメント。畑を掘り起こしていくと、貝や魚の骨が埋まる層が現れ、さらに進むと縄文土器や石器の断片、人骨までが出てくる。竪穴住居の痕跡も発見され、4000年前の人々の暮らしぶりをうかがわせる。発掘作業に動しむ者の汗ばむ肌もカメラは収める。



母なれば女なれば

1952年 | 100分 | 白黒 | 35mm * 国立映画アーカイブ所蔵作品

キヌタプロダクション | 監督: 亀井文夫 | 製作: 寺田昌彦、柏倉昌美 | 原作: 徳永直 | 脚本: 棚田吾郎 | 撮影: 瀬川順一 | 照明: 田畑正一 | 音楽: 飯田信夫 | 出演: 山田五十鈴、神田隆、岸旗江、二口信一
戦争で夫を奪われ、空襲で生き別れた長男を必死に探しながら、幼い子供たちを養うためにミシンを踏み続ける春枝。隣に暮らす中学教師が、彼女に密かな好意を寄せる。ある日、長男と再会でき、家族に一時の団欒が生まれた。だが、やがて母親と隣人教師の関係の進展に長男は不満を募らせる。恋人への想いと子供への愛情に引き裂かれる未亡人を名優・山田五十鈴が演じる。瀬川が経営者の一人となったキヌタプロダクションの第一回作品。



写真協力(財)川喜多記念映画文化財団

新しい鉄

1956年 | 31分 | カラー | 35mm [デジタル上映]

岩波映画製作所 | 企画: 八幡製鉄 | 脚本・演出: 伊勢長之助 | 製作: 吉野馨治 | 撮影: 瀬川順一 | 音楽: 間宮芳生
高度成長期の日本人の生活を支えた鉄製品は、いかに生産され、社会に広く行き渡っているか。山積みになった屑鉄が製鉄所に運ばれ、製鍊を経て圧延機で薄鉄板に生まれ変わり、さらに工場で加工されて自動車、家具・家電、建築資材などの製品が出来上がるまでの、一連の過程を鮮やかに描く。うねりをあげて作動する巨大な機械や次々と飛び出す鉄板は圧巻の迫力。製作進行で参加した土本典昭が瀬川順一と初めて出会った作品でもある。



挽歌

1957年 | 116分 | 白黒 | 35mm [16mm上映]

歌舞伎座プロ | 監督: 五所平之助 | 製作: 加賀二郎、内山義重 | 原作: 原田康子 | 脚本: 八住利雄、由起しげ子 | 撮影: 瀬川順一 | 美術: 久保一雄 | 照明: 平田光治 | 音楽: 芥川也寸志 | 出演: 久我美子、森雅之、高峰三枝子、石浜朗、渡辺文雄
霧の街・釧路を舞台とした文芸メロドラマ。思わぬ縁で出会った歳上の男に惹かれる劇団員の主人公。妻に若い男がいるのを知る建築士の彼も、彼女の思いに応え、二人は一夜を共に。しばし連絡を断っていた彼女だが、男が長期出張中と聞き及ぶと、その妻へと接近する…。原作は新人作家によるベストセラー小説で、映画も大ヒット。道東ロケで撮られた原野や湖畔の風景が、久我美子が繊細に演じるヒロインの複雑な心情を引き立てている。



©1957松竹株式会社

法隆寺

1958年 | 23分 | カラー | 35mm [デジタル上映]

岩波映画製作所 | 企画: 文化財保護委員会 | 脚本・演出: 羽仁進 | 製作: 吉野馨治 | 撮影: 瀬川順一 | 音楽: 矢代秋雄
法隆寺の西円堂で毎年行われる鬼追式の賑わいから映画は幕を開ける。中門の左右に立つ仁王像を皮切りに、世界最古の木造建築とされる寺院の宝物たちを次々に映し出す。釈迦涅槃を囲む塑像群、玉虫厨子や壁画、そして、閣に浮かび上がる釈迦如来や百済観音などの顔のアップが、物言わぬま観る者に語りかけてくる。瀬川が現地で選びとったアングルとカメラワーク、巧みな照明によって切り取られ、再創造された法隆寺のイメージ。



新しい製鉄所

1959年 | 43分 | カラー | シネマスコープ | 35mm * 国立映画アーカイブ所蔵作品

岩波映画製作所 | 企画: 川崎製鉄 | 脚本・構成: 伊勢長之助 | 製作: 吉野馨治 | 撮影: 瀬川順一 | 音楽: 池野成
東京タワーそびえる都心から東京湾を越え、千葉沿岸に新設された製鉄工場へと至る空撮で始まる本作は、伊勢の提案によりシネマスコープサイズで撮影された。ベルトコンベアで運ばれた鉱石が溶鉱炉で熱され、輝きを放って流れ出ていく。いくつもの工程を経て、ストリップ・ミルで品質の高い鉄板が生産される。鉄製品の紹介場面の最後には、前年運行が始まり、東京-大阪間の日帰りを可能にしたビジネス特急「こだま」が走り抜ける。



留学生チュアスイリン

1965年 | 51分 | 白黒 | 16mm

藤プロダクション | 企画: チュア君を守る会
| 演出: 土本典昭 | 製作: 工藤充 | 撮影:
瀬川順一、瀬川浩、身内哲雄、黒柳満
| 音楽: 三木稔

英領マラヤからの国費留学生に、同国
独立をめぐる抗議活動に関与した廉で
本国から帰国命令が下される。文部省が奨学金を打ち切ると大学も除籍処分
に。復学要求運動を追うカメラ。それに呼応するようにキャンパス中の学生た
ちが大学当局への抗議の輪に加わっていく。撮影直前に中止されたテレビ企
画を自主製作映画として続行し完成。手隙のスタッフが現場に向かう遊撃的
製作体制がとられ、撮影には4名が携わるがメインは瀬川順一。



©1965藤プロダクション

夜明け前の子どもたち

1968年 | 116分 | 白黒 | 35mm [16mm上映]

国際短篇映画社 | 企画: 財団法人木大会・心身
障害者福祉問題総合研究所 | 監督: 柳澤壽男
| 脚本: 秋浜悟史 | 撮影: 瀬川順一 | 編集: 高橋春
子、加納宗子 | 音響構成: 大野松雄、小杉武久
| 音楽: 三木稔

重い心身の障害を抱えた児童たち、その医療と
教育のため誕生した第二びわこ学園。瀬川たち
スタッフは施設に泊まり、1年間にわたり療育の実
践を記録した。日常の中で一人一人の障害児の
特性を発見し、手探りで発達の糸口を拓いていく。野洲の河原で行われる「石
運び学習」では、子供と大人たちが一緒になって療育の試行錯誤を繰り返す。
撮影スタッフもその活動に巻き込まれ、皆が生成変化を遂げる。柳澤の福祉映画
五部作の原点。



仕事=重サ×距離

三菱長崎造船所からのレポート

1971年 | 34分 | カラー |
16mm [デジタル上映]

日本リクルートセンター | 企画: 三菱重工
工業長崎造船所 | 脚本・演出: 松川八洲雄
| 製作: 江口昭彦 | 撮影: 瀬川順一 | 音
響デザイン: 大野松雄、大橋鉄矢 | 朗読:
岸田今日子

早朝の静かな港に、造船所へと出勤する男たちが現れる。鉄板を溶接し、部
品を取り付け、巨大なクレーンも操る、そんな重労働に従事する人々の一日。タ
ンカーを作り上げる若い労働者たちは、それぞれ夢を持ち、有り余るほどのエネ
ルギーを抱えていた。瀬川のカメラは、正面から一人一人の顔を撮り、彼ら
の仕事ぶりを讃えるように見つめる。その現場のイメージに重なる岸田今日子の
詩的なナレーションも、作品に豊かな魅力を付与した。



森と人の対話 井川山林の記録

1972年 | 50分 | カラー | 16mm [デジタル上映]

伊勢編集室 | 企画: 東海パルプ | 構成・編集: 伊勢長之助 | 脚本: 熱海綱一 | 撮
影: 瀬川順一 | 音楽: 原田甫

南アルプスに東海パルプが有する、25,000ヘクタールにおよぶ井川山林。計
画的な伐採と森林の育成を通じて豊富な木材資源が確保されていく様子が、
1年半にわたって撮影された。四季折々
の山や森の表情とともに、山林内の労
働に携わる人々の生活も記録している。
一連の「鉄」PR映画などで瀬川とコン
ピを組んできた名編集技師・伊勢長之
助が手掛けた最後の作品。病床にフィ
ルムを持ち込み編集作業が行われたと
の逸話も残る。



©いせフィルム

風 The Wind

1977年 | 11分 | カラー |
35mm [16mm/デジタル上映]

シブイ・フィルムズ | 企画: 富士写真フィルム
| 脚本・演出・撮影: 瀬川順一 | 製作: 狩谷
篤 | 音楽: 原田甫 | 監修: 松川八洲雄
富士フィルムが開発した35mmカラーネ
ガフィルム「タイプ8517」の新製品デモ
ンストレーションとして発表された、瀬川の演出作品。和太鼓のリズムが響くな
か、揺れる樹々、打ち寄せる波、翻る大漁旗、風紋を残す砂丘、街を疾走す
るバイク等々のイメージを次々とつなぎ、目に見えぬ「風」をいかに見せるかに
チャレンジしている。正面から撮られた農夫たちの顔も印象に残る。1997年の
『ルーベ』公開時に併映作品として上映された。



遠い一本の道

1977年 | 112分 | カラー | アメリカンビスタ | 35mm * 国立映画アーカイブ所蔵作品

左プロダクション、国鉄労働組合 | 企画・製作・監督: 左幸子 | 脚本: 宮本研 | 撮影:
瀬川順一、黒柳満 | 照明: 平田光治 | 編集: 浦岡敬一 | 音楽: 三木稔 | 出演: 井
川比佐志、左幸子、長塚京三、市毛良枝、殿山泰司

「鉄道一筋、保線の魂」。夕
張の国鉄保線員として勤続
30年。SIもやがて消えゆく時
代、機械化と合理化が導入
されるなか、主人公が加わる
労働組合も分裂をむかえる。
国鉄労組が映画製作に乗り
出し、縁あって女優左幸子

が監督を務めることに。実際の職員の声や姿をドキュメンタリー的に取り入れつ
つ、妻たちの働きぶりも描きこみながら、映画は最後に一路、日本の「西の果
て」、かつて炭鉱で栄えた島へと向かう。鉄道ファン必見。



白き氷河の果てに K2登頂の記録

1978年 | 123分 | カラー | 35mm * 国立映画アーカイブ所蔵作品

北斗映画プロダクション | 企画・監督: 門田龍太郎 | 製作: 葦原惟二 | 撮影: 瀬川順
一、川本茂、赤松威善、阿久津悦夫ほか | 編集: 鈴木暁 | 音楽: いずみ・たく

海拔8,611メートル、エベレストに次ぐ標高を誇るカラコルム山脈最高峰・K2に挑
む。その日本登山隊47名に、還暦をすぎた瀬川もメインカメラマンとして加わり
撮影記録を担った。大人数の現地ポ
ーターを雇ってキャラバンを組み、氷河を
のりこえて進む一隊。悪天候と雪崩の危
険におそわれるなか、頂上へのアタック
が試みられた。監督の門田龍太郎(もん
でんりょうたろう)は世界各地の「秘境」
を取材した映像作品で知られる。



不安な質問

1979年 | 85分 | カラー | 白黒 | 16mm [デジタル上映]

たまごの会映画委員会 | 構成・演出: 松川八洲雄 | 製作: 松川義子、湯浅欽史、武
田哲夫 | 撮影: 瀬川順一 | 音楽: 間宮芳生

都会暮らしの中で食の安全に疑念を抱いた人々が、自給を志して「たまごの
会」を結成、茨城に農場を開く。その5年間の活動を内側から記録し、現代社
会に問いを投げかけた映画。鶏や豚や
牛を養い、稲と野菜を育てあげては、収
穫物を郊外の団地に配送し、皆で食卓
を囲み宴会で合唱する姿は希望に溢れ
ている。瀬川は撮影の報酬として金銭
ではなく、卵や野菜をもらった。食堂に
飾られたブリューゲルの絵は瀬川が贈っ
たものだという。



【協カ・作品提供】国立映画アーカイブ、いせフィルム、海工房、彼方舎、記録映画保存センター、JCOM株式会社、シグロ、松竹株式会社、資料映像バンク、草月会、デコ企画、独立プロ名画保存会、日本ドキュメントフィルム、プロダクション・バンパー、磯田充子、杉浦良、まつかわゆま、安井喜雄、瀬川龍

【プログラム監修】筒井武文 【企画】田中晋平、中村大吾 【企画協力】岡田秀則

海とお月さまたち

1980年 | 50分 | カラー | 35mm [16mm上映]

日本記録映画研究所 | 演出：土本典昭 | 製作：茂木正年ほか | 撮影：瀬川順一、一ノ瀬正史、柳田義和、江原正雄 | 音楽：松村植三

「水俣」シリーズを手がけた土本典昭による、不知火海を舞台にした児童向け記録映画。日ごとに形を変える月の下で営まれる、海の生態系と漁師たちの暮らし。疑似餌や錘を手づくりし、それらの仕掛けでタコやイカを獲りフグや鯛を仕留めていく名人たちの手際と、それを手伝う家族の連携作業のディテールが活写される。「子どものための映画詩」と土本が呼ぶ本作に「水俣病」の語は登場しない。水中シーンは水族館でも撮影された。

©1980日本記録映画研究所



水俣の図・物語

1981年 | 112分 | カラー | 35mm *国立映画アーカイブ所蔵作品

青林舎 | 演出：土本典昭 | 製作：高木隆太郎、若月治 | 撮影：瀬川順一、一之瀬正史 | 音楽：武満徹 | 詩：石牟礼道子

戦後に「原爆の図」連作を発表、南京大虐殺やアウシュヴィッツの絵も共同で描いた丸木位里・丸木俊。夫妻は1979年から《水俣の図》の制作に着手する。流々庵と呼ばれるアトリエで二人が大作を描く姿に、瀬川のカメラが肉迫していく。完成し美術館に展示された巨大な絵画、その細部に描き込まれた水俣のイメージに、石牟礼道子の詩の朗読が重ねられる。胎児性患者の女性たちと丸木夫妻が、絵を媒介にして心を通わせる姿も忘れがたい。



©1981青林舎

早池峰の賦

1982年 | 184分 | カラー | 16mm

自由工房 | 演出：羽田澄子 | 製作：工藤充 | 撮影：西尾清、瀬川順一ほか | 音楽監督：秋山邦晴

岩手県北上山地の主峰・早池峰山。その麓の集落、岳と大償では、中世まで遡るとされる山伏神楽の芸能が今なお伝承されている（2009年ユネスコ無形文化遺産登録）。近代化によって村の生活が変貌を遂げるなかでも、神々の暮らす山への信仰、伝統ある祭の文化を守り続ける人々。1965年に羽田が当地を初訪問した際に行方不明になった近隣育ちの瀬川が、羽田念願の企画たる本作では山班として冬山シーズンなどの撮影を担った（西尾が里班）。



アントニー・ガウディー

1984年 | 72分 | カラー | 35mm

勅使河原プロダクション | 製作・監督・編集：勅使河原宏 | 製作：野村紀子 | 撮影：瀬川順一、柳田義和、瀬川龍 | 音楽・音響：武満徹

集合住宅カサ・ミラ、グエル公園、未完成のサグラダ・ファミリア贖罪教会…。アントニー・ガウディーが遺し、今もバルセロナの街の景観をなす独創的な建築群。瀬川のカメラは、生命体のように波打つ建物の曲線、装飾、空間の光と影に誘われ、動き続ける。建築家を生んだカタルーニャの歴史・文化も回顧され、奇岩が並ぶモンセラの風景も画面に現れる。ナレーションは用いず、カタルーニャ民謡を編曲した武満徹の音楽が響く。



©Sogetsu Foundation

をどらばをどれ

1994年 | 50分 | カラー・白黒 | 35mm [デジタル上映]

踊り念仏映画製作委員会、プロダクション・バンパー | 脚本・演出：伊勢真一 | 企画：佐藤哲善、佐藤妙子 | 制作：武井登美 | 撮影：瀬川順一、柳田義和 | 編集：熱海鋼一 | 音響構成：木村勝英

鎌倉時代に一遍上人が伝え、長野県佐久市跡部の村人たちが継承し、毎年田植え前に行われてきた踊り念仏。撮影中病に倒れながらも瀬川のカメラがその世界に分け入った。念仏保存会には、亡くなった子供らの成仏を祈る参加者たちの姿もある。やがてカラー画面がモノクロに移行、踊りは生まれ変わりの旅路となり、無我の境地に至る。当地の踊り念仏は、2022年に「風流踊り」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。



奈緒ちゃん

1995年 | 98分 | カラー | 16mm

*国立映画アーカイブ所蔵作品

奈緒ちゃん映画製作委員会、デコ企画 | 演出：伊勢真一 | 製作：大槻秀子 | 撮影：瀬川順一、瀬川浩、柳田義和、瀬川龍ほか | 編集：熱海鋼一 | 音響構成・音楽：木村勝英、伊藤幸毅

てんかんと知的障害を抱える少女・奈緒ちゃんは、お母さんとお父さん、弟の四人で暮らしている。支援学級に通い、地域の住民たちに見守られながら、ゆっくり成長を遂げる彼女。障害をもつ子の親同士の交流を通じて、やがて地域作業所「びぐれっと」を開所するお母さん。監督の姪である奈緒ちゃん一家のもとへ、家族ぐるみの付き合いだった瀬川順一をはじめ、スタッフたちが12年間通い続けた記録。本作公開2ヶ月後に瀬川は永眠。



©いせフィルム

ルーペ カメラマン瀬川順一の眼

1997年 | 90分 | カラー | 16mm [デジタル上映]

瀬川さんを記録する会 | 演出：伊勢真一 | 撮影：安井洋一郎、瀬川順一、瀬川龍、柳田義和 | 音楽：横内丙午 | 出演：瀬川龍一、瀬川フミ

瀬川順一最後の2作『をどらばをどれ』『奈緒ちゃん』の監督を務めた伊勢真一が、両作の制作風景を交えながら、父・長之助の友人でもあった不世出のシネマトグラファーの軌跡を辿る。『戦ふ兵隊』ロケ現場で遭遇した一件をめぐって決定的な回顧を繰り返し語る瀬川。完成された映画に「いないけどいる」撮影者という領分への自負や、ドキュメンタリーへの傾倒をざっくばらんに話す姿も収められている。瀬川逝去後に完成・公開。



©いせフィルム

回想・瀬川順一 土本典昭、2003年3月13日

2025年 | 21分 | カラー | 16:9 | デジタル

プロダクション・バンパー | 監督：筒井武文 | プロデューサー：武井登美 | 撮影：瀬川龍 | 編集：小林和貴 | 出演：土本典昭

仕事部屋の編集機を背に土本典昭が、多士済々たる岩波映画製作所を振り返りつつ、映画の何たるかを教わったという瀬川順一との交流を述懐する。話題は瀬川と協働した監督作に及び、『留学生チユアスイリン』の撮影への率直な評価や、『水俣の図・物語』を瀬川に依頼した所以も披露される。聞き手は監督の筒井、撮影は順一の子息・瀬川龍。来るべき鈴木達夫をめぐるドキュメンタリーの派生作品で、今回の特集上映に際して作られた。



●特記ない限りスタンダードサイズ 【作品紹介執筆】田中晋平、中村大吾